毛詩正義　小雅　杕杜篇　譯注稿

田中和夫

凡例

○《毛詩正義》本文は足利學校秘籍叢刊（汲古書院影印）《毛詩註疏》を底本とした。（簡稱、足利本）

○足利本の他、次の諸本を用いて校勘を行っている。異体字については必要と判断される場合にのみ注記し、原則的には校勘を行わない。

①宋　槧本《毛詩正義》（巻八至巻二四）東方文化叢書、影印本（簡稱、單疏本）

②元　中國國家圖書館藏《毛詩註疏》元刻明修本。中國國家圖書館藏本、「中華再造善本」北京圖書館出版社影印を用いた。（簡稱、元刊本）。

③明　嘉靖年間刊《毛詩注疏》内閣文庫藏、架藏（簡称、閩本）

④明　萬歷十四年　北京國子監刊《十三經註疏》本（簡称、監本）

⑤明　毛氏汲古閣刊《十三經注疏》本（簡称、毛本）

⑥清　乾隆四年武英殿校刊、乾隆十三年重刻《十三經注疏》本（簡称、殿本）

⑦清　文淵閣四庫全書《毛詩注疏》本（簡称、全書本）

⑧清　嘉慶二十年南昌府學開雕阮元校勘《十三經注疏》本（簡称、阮本）

⑨宋　宋人魏了翁《毛詩要義》、日本天理大学圖書館所藏宋淳祐十二年徽州刻本（『域外漢籍珍本文庫』、西南師範大学出版社・人民出版社影印。簡称、徽州本）。更に光緒丙戌江蘇書局開雕を用いた（簡称、光緒本）。

文章の意味を取る上で必要と思われる部分は適宜括弧をつけて内容を補った。

杕杜　勞還役也。杕杜は帰還兵士を労った詩である。

〔毛傳〕役戍役也。毛傳：役は戍役（国境守備の兵士）。

有杕之杜　杕たる杜あり　唯一本　すらりと伸びている杜の木

有睆其實　睆たる其の実あり　豊かにその実を実らせている

〔毛傳〕興也。睆實貌。杕杜猶得其時蕃滋。役夫勞苦、不得盡其天性。

毛傳：興である。睆は杜の実の状態。杕たる杜ですらその時節を得れば、葉が茂り実が実る。しかし、国境守備に赴いた兵士は征地で苦労するばかりで、その天性〔＝室家を安んじ子孫を生み繁栄させるという天性〕を尽くすことが出来ない。

王事靡盬　王事盬きことなし（注1）　王命によるこの国境守備の任務は気を抜けるようなものはなく

繼嗣我日　我が日を継嗣す（注2）　私の任務は毎日毎日続く

箋云、嗣續也。王事無不堅固、我行役續嗣其日、言常勞苦無休息。

鄭箋：嗣は続くこと。王事は堅固でないものはなく（ゆるがせには出来ず）、私の行役〔＝兵士としての任務〕は毎日毎日と続く。常に労苦が絶えず、休む暇もないことをいう。

注

（1）王事靡盬　『詩經』に都合五箇所に現れる句である。唐風「鴇羽」、小雅「四牡」、「采薇」、「杕杜」、「北山」。その鄭箋ではそれぞれ、「我迫王事、無不攻致、故盡力焉」（鴇羽）、「盬、不堅固也」（采薇）、「王事無不堅固」（杕杜・北山）、「四牡」では特にこの句に箋注は施されていないが、毛傳に「盬、不堅固也」とあり、それに従っているものと思われる。

（2）繼嗣我日　錢澄之『田間詩學』に「自閩人之屈指歸期、日復一日而言也。蓋往役之始、其日王家之日、及期以後、其日則我之日也。故曰『繼嗣我日』。」役に往く始めの日を「王家の日」とし、期〔帰還すべき時期〕に及ぶ以後は、その日は「我の日」であ

るとする。また「我、女自我也。女心、自上人謂之也。」といい、鄭箋が我を行役の人とするのとは異なる。（『田間詩學』は二〇〇五年七月　黄山書社刊本）

日月陽止　日月　陽なり　もう陽月、十月になった

女心傷止　（校1）女心　傷むなり　家を護っている妻は心傷ませている

征夫遑止　征夫　遑（いとま）あらん　我が夫は今頃、暇〔＝帰還命令〕が出ているころのはず

校正

（1）女心　監本、「汝心」に作る。誤刻であろう。

箋云、十月爲陽。遑暇也。婦人思望其君子、陽月之時、已憂傷矣。征夫如今已間暇、且歸也。而尚不得歸、故序其男女之情以説之。陽月而思望之者、以初時云、歲亦莫止。

鄭箋：十月を陽という（注1）。遑とは暇の意味。婦人がその夫のことを思い、陽月十月にはもう憂いに沈む。戦に言った夫は今頃はもう任務が解けて、帰ってくるころなのに、まだ戻ってこない。そこで男女の情愛を序べて、その思いを言い表しているのである。〔特に〕陽月十月に夫を思うというのは、〔出征の〕初めの時「歲亦莫止（歲亦た莫れるとき）」（「采薇」）と云っているためである（注2）。

注

（1）十月を陽という　小雅「采薇」の「曰歸曰歸、歲亦陽止」の鄭箋に「時坤用事、嫌於無陽、故以名此月爲陽」とある。

（2）初めの時　出征したその初めの時。詩序に拠れば、「采薇」の詩を歌って戍役を遣わし、「出車」の詩を歌って帰還を労い、「杕杜」の詩を歌って還るを勤す〔休息させる〕、とある。戍役を遣わす時の詩「采薇」一章に「曰歸曰歸、歲亦莫止」とあり、その

鄭箋には「曰女何時歸乎。何時歸乎。亦歳晩之時、乃得歸也。又丁寧歸期、定其心也。」と解されている。出征に当たって、妻が帰還時期を尋ねると、「歳亦莫止（歳亦た莫れるとき）」帰ることが出来よう、と言われているので、十月になると、その時、つまり出征の初めの時のことを思い出すのである。

○疏「有杕至遑止」

正義曰、文王勞還役言、「汝等在外、妻皆思汝言、『有杕然特生之杜、猶得其時、有睍然（校1）其實、蕃滋得所。我君子獨行役勞苦、不得安於室家、以盡天性而生子孫、乃杕杜之不如。所以然者、由王之事理、皆當無不攻緻、使我君子行役』、繼續我所行之日、朝行明去、不得休息、至於此日月陽止、十月之時。爾室家婦人之心憂傷矣。以爲『征夫而今已間暇、且應歸矣。』而尚不歸、所以憂傷。」

校正

（1）睍然　單疏本・閩本・監本・毛本・殿本・全書本、「睆然」に作る。足利本・元刊本・阮本、「睍」に作る。阮元「挍勘記」に「閩本明監本毛本睍作睆、案所改是也」という。

○有杕より遑止まで

正義：文王が帰還兵士を労って言った、「お前たちは家を離れていたので、妻女はお前を心配して、『杕然（ていぜん）と一本（ひともと）生えている杜（やまなし）の木ですら、なお時が来れば睍然とその実をみのらせる。それなのに私の夫は一人国境守備に行って苦労して、落ち着いて家に過ごして、天性を尽くし、家の後継ぎをもうけることが出来ないでいる。杜の木にも及ばない。このようになっている訳は、王〔命による務め〕事は、処理するのに、ゆるがせに出来ないことばかりで、我が夫は国境守備の任務に行かされた。』と言っている。私〔文王〕が命じて行っている〔国境守備の〕日々は続いてゆき、一日が過ぎればまた一日と、休む暇もなく、この陽の月、十月になってしまった。お前たちの妻女は大変思い煩い、胸を痛めなが

ら、こう思っている『戦に行ったあの人は今はもう任務が解けて、もうすぐ帰って来るでしょう』。」

有杕之杜　杕（てい）たる杜（と）有り　唯一本　すらりと伸びている杜（やまなし）の木

其葉萋萋　其の葉萋萋（せいせい）たり　枝葉が青々と茂っている

王事靡盬　王事盬（もろ）きことなし　王命による国境守備の任務は気を抜けるようなものはなく

我心傷悲　我が心傷み悲しむ　〔任務に就いている夫を思うと〕悲しみがこみ上げます

箋云、傷悲者念其君子於今勞苦。

鄭箋：「傷み悲しむ」とはその夫が今苦労しているだろうと心配していること。

卉木萋止　卉木（きぼく）萋たり　木々の葉はまだ青々としているのに

女心悲止　女心悲しむ　〔出征した夫を思って〕家にある妻は悲しみつつ

征夫歸止　征夫帰る　夫が帰ってくる〔時のことを思う〕

〔毛傳〕室家踰時則思。

毛傳：家にある者が〔帰って来るべき〕時のことを〔今から〕想像するのである。

○疏「傳室家踰時則思」

○毛傳の「室家踰時則思」について

正義曰、傳以「卉木萋止」則時未黄落、猶憂愁也（校1）。前期云、歳亦暮止、未至歸期而女心悲者、以室家之情、踰時則思也。

校正

（1）猶　沈廷芳『十三經注疏正字』に「猶疑已字誤」とある。正義の経文文脈の取り方からすれば、意味上は、「已に」となるべき所。但し、足利本・單疏本・監本・閩本・毛本・阮本・殿本・全書本、すべて「猶」に作る。

正義：毛傳では「卉木萋止（卉木　萋なり）」とあるので、時節はまだ木々の葉が黄ばみ落ちる時ではないのに、なおもう憂い愁えているのは、出征の当初に「歳亦暮止（歳亦た暮れるとき）」〔歳が暮れる時には帰ってくる〕と約束した。まだその時期になっていないのに、「女心　悲しむ」というのは、家を護る妻としての気持ちから、〔今はまだ十月だが〕時を越えて〔帰ってくるべき歳末の時に心を馳せて夫を〕思うのである。

補注

正義による所のこの毛傳の文脈の取り方・理解の仕方には、やや無理なところが感じられる。此に関して、『毛詩稽古編』には、この「室家踰時則思」正義の解釋について、「孔疏申之以萋止爲時未黄落、在歳莫之前。此於文義未順、恐非毛意。」という。この「杕杜」の詩篇全体、及びこの前の「采薇」「出車」篇とも関わる考え方で、「首章曰『日月陽止』即《采薇》之「歳亦陽止」謂遣戍年之歳莫也。次章「卉木萋止」即《出車》之「卉木萋萋」謂遣戍明年之春暮也。三詩一遣二勞、語意相應。出師之初、告以歳莫即歸、至期而望之情也。此「陽止」之時、女心所以傷也。然連平二寇、未獲遽歸、踰期至春莫、則卉木萋矣。勞還兩詩、皆實紀歸時之景色也。故首章云、「征夫遑止」、僅言可以歸耳。次章云、「征夫歸止」、則實欲歸矣。前雖望之、明知其未歸、後則知其將歸而望之益切也。一傷一悲、情同而事異矣。次章傳云「室家踰時則思」、正謂踰曰歸之時耳。孔疏申之以萋止爲時未黄落、在歳莫之前。此於文義未順、恐非毛意。（胡承珙『毛詩後箋』巻十六「杕杜」所引：陳啓源『毛詩稽古篇』〔北京圖書館藏、清抄本、山東友誼書社影印〕巻九「杕杜」）という。理解しやすい説であるが、「連平二寇、未獲遽歸」というのが、想定されていることにすぎないという嫌いはなお残る。

陟彼北山　彼の北山に陟って　あの北山に登って
言采其杞　言に〔鄭箋：言〕其の杞を采る　〔私は〕杞を摘む〔杞を摘むことに託してあなたの居る方を眺めやる〕
王事靡盬　王事盬きことなし　王命による国境守備の任務は気を抜けるようなものはなく

憂我父母　我が父母を憂へしむ　我が父母〔=我が夫〕の苦労も並大抵ではないでしょう

箋云、杞非常菜也。而升北山采之、託有事以望君子。

鄭箋：杞は普通に食べる野菜ではない。それなのに北山に登って採るのは、その杞を摘む事に託して、〔見晴るかすことの出来るこの北山に登って〕夫〔の居る方角を〕眺めやるのである（注1）。

注

（1）小雅「北山」の詩にこと同じ「陟彼北山、言采其杞」の句がある。その鄭箋には「言、我也。登山而采杞、非可食之物、喩己行役不得其事」とある。

檀車幝幝　檀（まゆみ）の車は**幝幝**（せんせん）たり　檀作りの戎車は傷み

四牡痯痯　四牡痯痯（かんかん）たり　戎車を牽く四頭の牡馬も疲れている

征夫不遠　征夫遠からず　戦に行ったあの人は間もなく帰って来るでしょう

〔毛傳〕檀車役車也。**幝幝敝貌。痯痯**罷貌。

毛傳：檀の車とは檀で作った役車（注1）。**幝幝は疲弊した様子（注1）。痯痯**は疲れた様子。

箋云、不遠者言其來喩路近。

鄭箋：遠からずというのは、やって来る時期が近いということを道が近いということに喩えて言ったもの。

注

（1）役車　『釋名』巻七に「役車、給役之車也。」とある。役夫に給する車。『周禮』「巾車」に「服車五乘…大夫乘墨車、士乘棧車、庶人乘役車。」とあり、その鄭司農注に「役車方箱、可載任器以共役。」とある。四角い箱形の車で、工具類を載せ役事に供するもの。

（2）**嘽嘽敝貌『經典釋文』に「嘽、尺善反、又勑丹反、『説文』云、車敝也」とあり、嘽は車の蔽(おお)い。しかし、「嘽嘽」とは次の「痡痡」との対応から、状態を表現しているはずであり、正義に「嘽嘽然弊（嘽嘽然として弊す）」とあるので、疲弊した様子、と読むべきであろう。段玉裁『説文解字注』に「嘽、車敝皃　敝各譌作弊今正。皃、釋文引作也」とある。**

○陟彼至不遠

正義曰、言汝戍役之妻、思爾而不得、故升彼北山之上、我采其杞木之菜（校1）。杞木本非食菜而升北山以采之者、是託有事以望汝也。以汝勞苦、故言王事無不堅固、以君子勞苦堅故之（校2）、由是使我憂之。父母實夫也。謂之父母者（校3）、已（校4）尊之、又親之也。又言我君子所乘檀木之役車、今　**嘽嘽然弊（校5）、所乘四牡之馬、今痡痡**然疲。征夫之來不遠、當應至也。如何許時不至。使己念之。

校正

（1）我采其杞木之菜　足利本・單疏本・元刊本・阮本、「我采其杞木之菜」に作り、監本・閩本・毛本・殿本・全書本、「采其杞木之菜」に作る。

「我采其杞木之菜」であれば、兵士の妻の言葉、「私は杞木の葉を摘む」となり、「我」がなく、「采其杞木之菜」であれば、上の文とのつながりから、文王が兵士に諭す言葉となり、「（お前たちの妻は）あの北山に登って杞木の葉を摘んだのだ」の意味となろう。阮元「挍勘記」には「閩本監本毛本脱我字」と事実関係のみ記されている。

（2）故之　足利本・元刊本・阮本、「故之」に作り、單疏本・監本・閩本・毛本・殿本・全書本、「固之」に作る。

（3）者　足利本・元刊本・監本・閩本・毛本・阮本、「也」に作り、單疏本・殿本・全書本、「者」に作る。「者」に作るのがよい。沈廷芳『十三經注疏正字』に「也當者字誤」という。單疏本を見てはいないが、結果的に單疏本を支持している。阮元「挍勘記」には「案也當作由讀下屬」とあり、「也」を文中の助字とみなしている。

（4）已　足利本・元刊本・監本・閩本・毛本・殿本・全書本、「已」に作り、單疏本、「己」に作る。次の又とのつながりから、「已

～又…」の構造になることも考えられるが、下の鄭箋「杞非至君子」の注の如く、「己（われ）」と読むべきであろう。阮本は「已」に近い。

（5）弊　足利本・單疏本・元刊本・阮本、「弊」に作り、監本・閩本・毛本・殿本・全書本、「敝」に作る。同じ意味。

○陟彼から不遠まで

正義：「お前たち兵士の妻たちは、お前たちを思っても心かなわずに〔ただ思うだけでは充分満足できずに〕、あの北山に登って杞木の菜を摘んだのだ。杞木は本来食べられる野菜ではないのに北山に登ってこれを摘むというのは、野菜を摘むということに託して、お前たちの居る方角を眺めやったのだ。お前たちが苦労しているので、『王事はゆるがせに出来るものはなく、夫の苦労も並大抵ではないでしょう、私は大変心配です』と言っている。」父母とは実は夫のことである。夫のことを父母と呼んでいるのは、これを尊敬するとともに、親しんでいるためである。又こうも言っている、『我が夫の乗る檀の戦車は、今**嘽嘽然と傷んでおり、乗っている車を引いている四頭の馬は今、痯痯**然と疲れた様子である。戦地に行った夫が戻ってくるのはそんなに先のことではない、きっともうすぐ戻ってくる。どうしてその時が早くやって来ないのだろう。私は本当に心配だ。』

注

（1）如何許　如何許で一語と取り、「いかんぞ（どうして～なのか）」とみなした。「許」は語気詞。「奈何許」と類似。

○箋杞非至君子

鄭箋の「杞非」より「君子」まで

正義曰、此類上下皆陳婦人思夫之事、故爲託采（校1）以望君子、不與「北山」同也。以下章「期逝不至」、上章「我心傷悲」類（校2）、則「憂我父母」、謂夫爲父母也。「日月」云、「父兮母兮、畜我不卒」、莊姜稱莊公爲父母、與此同

也。

校正

（1）託采　足利本・單疏本・元刊本・監本・閩本・毛本・阮本・殿本・全書本、「託采」に作り、『要義』（徽州本・光緒本）に「託采杞」に作る。沈廷芳『十三經注疏正字』に「采下當脱菜字」とある。

（2）類　足利本・元刊本・監本・閩本・毛本・阮本・殿本・全書本、「類」に作る。單疏本及び『要義』（徽州本・光緒本）は「類之」に作る。

正義：ここはこの上の章下の章、共に婦人がその夫を思うことを陳べていることと同類の〔句意〕なので、野菜を採ることに託して夫の居る方角を眺めやっているとしているのであって、〔その点で、徴発されて国境守備につく兵士が父母を思って「王事靡盬、憂我父母（王事盬きことなし、我が父母を憂へしむ）」と自分の両親を父母と言っている〕「北山」のとは異なっている。下の章で「期逝不至（期逝くも至らず）」時期が過ぎても戻ってこないこと、上の章では「我が心傷み悲しむ」といった類から考えれば、「憂我父母」の（父母は）自分の夫のことを謂っていることがわかる。〔邶風〕「日月」に「父兮母兮、畜我不卒」とあり、〔衛の国夫人〕荘姜が〔自分の夫〕荘公を父母と呼んでいるのもこと同じである（注1）。

注

（1）自分の夫を父母とよぶ

邶風「日月」に「父兮母兮、畜我不卒（父よ母よ、我を畜（やしな）ひて卒（そ）へず）」その鄭箋に「父兮母兮者、言己尊之如父又親之如母、乃反養遇我不卒（「父よ母よ」とは己之を尊ぶこと父の如く、之を親しむこと母の如きも、乃ち反って我を養ひ遇して卒へざるを言ふ；私〔荘姜〕は荘公を尊ぶこと父の如く、之に親しむこと母の如くであったのに、荘公は反って私を最後まで養い通してはく

れなかった)」とある。

○傳檀車役車

正義曰、此戍役之妻説君子所乗役車也。以檀木爲車。「伐檀」曰、「坎坎伐檀兮」、又曰、「伐輪」「伐輻」、是檀可爲車之輪輻。又「大明」云、「檀車煌煌」、武王之戎車、是檀之所施於車廣矣。則役夫（校1）以從征之故、其甲士三人所乗之車而備四馬、故曰四牡、非庶人尋常得乗四馬也。

校正

（1）役夫　『要義』（徽州本・光緒本）、「夫」に作る。

○毛傳の檀車役車について

○正義：これは兵士の妻が夫の乗っている役夫用の車を指して言っているのである。檀の木制の車。魏風「伐檀」には「坎坎伐檀兮（坎坎（かんかん）と檀を伐る）」とあり、また「伐輪」「伐輻」とある。檀で車の車輪・車輻を作ることが出来る。大雅「大明」に「檀車煌煌」とあり、〔殷を伐ったとき〕武王が乗った戎車は檀の木が周り一面に施されていたことがわかる（注1）。そして、兵士達がこれに従って行ったのである。なので、甲冑を着けた兵士三人が乗る車であって始めて四頭の馬が付けられる。そこで「四牡（痟痟）」と「四牡」と言っているのであって、庶民が普通に四頭立ての馬車に乗ることができるのではない。

注

（1）檀の木が…「檀之所施於車廣矣」を「檀の車に施す所広し」と読んだが、或いは「車廣」で特に車の一部分を指す用法があるかも知れない。

匪載匪來　載せず来たらず　車に荷物を載せていない、まだ戻って来られないのだろう

憂心孔疚　憂心　孔だ疚む　心配のあまり病気になりそうです

箋云、匪、非、疚、病也。君子至期、不裝載（注1）、意不爲來。我念之、憂心甚病。

鄭箋：匪は非、疚は病むこと。夫は帰るべき時期になっても、車に荷物を載せて〔帰り支度をして〕いない、思うにまだ戻って来られないのだろう。私はこれを思うと大変心配になり、不安になる。

注

（1）不裝載　ここの「裝載」とは物を車に載せること。この前の詩篇「出車」に「召彼僕夫、謂之載矣」とあり、その鄭箋に「王命召己、己即召御夫、使裝載物而逝（王命じて己を召す、己即ち御夫を召して、物を裝載せしめて逝く）」とある。

期逝不至　期逝くも至らざれば　帰って来るべき時期になっても戻ってこないので

而多爲恤　多ます恤いを為す　ますます愁いがつのる

〔毛傳〕逝、往、恤、憂也。遠行不必如期。室家之情、以期望之。

毛傳：逝は往くこと、恤は憂うること。家を離れて遠くに出征すれば、予定の帰還時期には必ずしも帰ることは出来ない。家に残された者の気持ちとしては、予定の帰還時期に帰ってきてほしいと待ち望むのである。

卜筮偕止　卜筮偕にす　〔帰って来る時期を〕卜で占い、筮で占ったら

會言近止　〔筮人を呼び〕会わせれば、〔その〕言近し（毛傳）

亀卜で占う人、筮竹で占う人合わせ集ってどちらも、もう間もなくだという

〔その繇に〕会言して近しとなす（鄭箋）

その占形はどちらももう間もなく戻る、という。

征夫邇止　征夫邇（ちか）し〔なので〕夫はもうすぐ戻ってくるでしょう

〔毛傳〕卜之筮之、會人占之。邇、近也。

毛傳：亀卜で占ったり、筮竹で占い、占い人を集めて占う。邇は近いこと。

箋云、偕、俱：會、合也。或卜之、或筮之、俱占之、合言於　爲近、征夫如今近耳。

鄭箋：偕は俱にの意。會は合わせるの意味。亀卜で占い、筮竹でと、二種類の方法で占っても、そのどちらの卜形でも「近い」とでた。出征した兵士〔の帰還は〕今や間近だ。

疏○匪載至邇止

「匪載」から「邇止」まで

○毛以爲文王勞戍役言、汝之室家云、我君子（校1）歸期已至、今非裝載乎。其意非爲來乎。何爲使我念之、憂心以至於甚病。所以然者、汝室家言、本與我期、已往過矣。於今由（校2）不來至、由是而使我念之、多爲憂以致病矣。汝室家既憂、或卜之、或筮之、其卜筮、俱會聚人占之、其言近止。既占云近、則征夫如今且近止、應到不遠矣。汝室家念汝如是也。

○鄭唯卜之筮之俱占之合言於繇爲異。餘同。

校正

（1）我君子　足利本・元刊本・監本・毛本・阮本・殿本・全書本、「我君子」に作る。單疏本、「我之君子」に作る。

（2）由　單疏本・監本・毛本・殿本・全書本、「猶」に作る。足利本・元刊本・阮本、「由」に作る。

○毛傳の解釋：文王は国境の守備兵を労って言う、「お前たちの細君は言っている『私の夫が帰ってくる時期になったので、今頃は車に荷物を載せているのではないかしら。戻ってくるということではないかしら。どうしてあなたを心配

する余り、病になってしまうほどになってしまったのでしょう』と。このようである理由について、お前たちの細君はこう言っている『もともと私と約束した、その帰還の時期は既に過ぎてしまった。それなのに今なお戻ってきていない。それで私は夫を思って心配の余り病気になってしまった』と。お前たちの細君は心配して、『卜で占い、筮で占ったけれど、卜の時も、また筮の時も、複数の占い師が集まって占形をみて、近い、と言いました。占って、近いと出たからには夫が戻ってくるのはもうすぐ、きっと間もなく戻ってくるでしょう』といっている。お前たちの細君はお前たちをこのようにも心配しているのだ。」

○鄭玄はただ「卜之筮之、俱占之、合言於繇（之を卜し、之を筮し、俱に之を占って、言を合せ、繇に於いて：亀卜で占っても、筮竹で占っても、どちらの占形でも俱に）」としているのが、鄭箋と異なっている部分で、あとは同じである。

○傳會人占之

毛傳の會人占之について

正義曰、傳以會之言（校1）是會聚人占之義、即與士冠禮筮日（校2）、士喪禮筮宅旅占同。故爲會人占之。箋以上句言偕止者、俱占之、若不爲占則文皆空、設偕既爲占則會當爲合、故易之、爲合言於繇、謂合言於兆卦之繇也。

校正

（1）會之言　足利本・單疏本・元刊本・阮本、「會之言」に作り、監本・閩本・毛本・殿本・全書本、「會言」に作る。「會言」として訳した。

「會之言」であれば、「會という語の意味は」となり、「會言」であれば、経文の「會言」とは、の意味となり、やや違いがでる。

阮元「挍勘記」には「閩本明監本毛本脱之字」と事実関係のみいう。

（2）日　足利本・元刊本・監本・閩本・毛本、「曰」に作る。阮本・殿本・全書本、「日」に作る。單疏本は「曰」にも「日」にも

読める。『十三經注疏正字』に「日誤曰（日を曰くに誤る）」とある。「士冠礼」の「冠には必ず日を廟門に筮す」とあることから、「日」に作るのがよい。

正義：毛傳では「會言」は、複数の占い人を集めて占うという意味に取っている。つまり「士冠禮の筮日、士喪禮の筮宅旅占」（注1）と同じとみて、それで「會」は人〔同席の占い師〕を集めて占う、意味だとするのである。鄭箋では上の句で「偕止」と言っているのは、〔亀トと筮で〕俱に占うことであって、もし〔ここで〕占うのでなければ、経文はどちらも空虚になってしまう。もし「〔亀トと筮と〕偕に」既に占いをしたのであれば、「會」は「合」の意味に取るべきであると考え、毛傳の説を変え、「合言於繇」とみなし、「兆卦の繇に合言して〔占ったその占形に言を合しくして〕」という意味としたのである。

注

（1）士冠礼の筮日云々　『儀禮』「士冠禮」に「士冠禮、筮于廟門（士冠礼は廟門に筮す）」とあり、その鄭玄注に「筮者以蓍問日吉凶於易也（筮とは蓍で以て日の吉凶を易に問うなり）。冠必筮日於廟門者、重以成人之禮成子孫也（冠には必ず日を廟門に筮するは、成人の礼を以て子孫を成すを重んずるなり。廟謂禰廟。不於堂者、嫌蓍之靈由廟神（廟とは禰廟〔父のみたまや〕を謂ふ。堂に於いてせざるは、蓍の霊の廟神に由るを嫌へばなり〔筮で占うのを堂において行わないのは、〔廟門の外で行う筮の〕蓍〔や亀〕の霊が廟神〔の霊〕に由ることを嫌うためである〕という。

『儀禮』士喪礼に「筮宅。冢人營之、掘四隅、外其壤（宅〔墓地〕を筮す。冢人〔墓地兆域を掌る者〕之を営み〔＝度る：定めはかる〕、四隅を堀り、外に其れ壤す〔其の壤を外にす〕その四隅の外側に土を盛る〕。……東面、旅占卒〔〔筮人〕東面し、旅占し卒ふ〕筮人東に向かって他の筮人達と一緒に得られた卦をみて吉凶を判断し、占いを終える。」とある。